



心一変（こころいっぺん）

増永 幸子

出会ってしまいました。出だしから唐突ですが、私は56歳の何の取り柄もない主婦です。究極の取り柄と言え、骨太で病気知らずの健康体のみ。特にガン家系でもなく、食生活も野菜を多めに摂るように心掛け、油はオリーブオイル使用、好き嫌いも特に無いのでまんべんなく色々な食材で調理をして食べていたつもりです。両親のように、70代後半迄ボケずに平均寿命を全うして、天に召されて逝くのだと、勝手に思い込んでいました。

ところが今年、平成26年に入ってから、たまに左肋骨下に何となく違和感を感じ、きりっと来るような痛みが少しあり、気になりながらも、疲れかな？と思っていたら、日を追うごとに、お腹全体がふくらんで来たのです。まるで妊婦さんのように。「ダイエットしなければ」と本気でスクワットやエクササイズを試みたものの、効果ゼロ。3~4ヵ月も経つ頃には、お腹もぱんぱんに腫れて、皮膚のたるみも無くなって来たのです。病院とはお産以来縁がなかった私。そんな時「変なプライドを出さないの」と娘から一喝され、一緒に自宅近くの内科クリニックに行くが、全く分からないので近くの夜間救急病院を紹介されました。触診もせずに問診表に書いた告知のみを見て、医師は「過敏性大腸炎でしょう」と一言。1週間分の飲み薬を出されたものの、全て飲み終わってもお腹の張りは勿論、症状に変化が無いので、振り出しに戻り、最初に訪れた内科の医師に、タクシーでワンメーターちょっとで行ける大手の病院への紹介状を書いてもらい翌日、すぐに行きました。

初診は消化器内科での診察なのですが、ラッキーだったのは、その日のうちに、CT検査を受けることが出来た事。結果は、一週間後。自分の息子の

ような若手の医師の口から出た第一声は、「リンパ腫ですね」。一緒に聞いていた主人と娘と3人で、その時たぶん、あぐりと口をあけていたような気がします。

そして、出会ってしまったのです。CT画像に写るいくつかの白いものに。そう、それが血液のガンだったのです。

その後、細胞の組織を鎖骨近くから一部切除。手術後、病理の細胞診の結果、悪性リンパ腫濾胞性低悪性度という診断が出て、紹介先の専門医のいる病院での初診の日に即入院と言われ、生活が一変しました。ガンの告知を受けてから、3年前の8月8日22歳の時に心筋梗塞で突然亡くなった息子に対して、娘が「お兄ちゃんが寂しがってお母さんをお母さんと呼んでいるに決まっている！許せない！」と怒って言うので、私が「えっ？絶対に死なないよ」と娘と主人と亡くなった息子にも、そして自分に言い聞かせるように、強く誓いました。

入院中、忙しい合間をぬってお見舞に来てくれる家族、そして友人達には本当に頭の下がる思いで、頭の中に浮かぶのは、感謝の2文字のみ。毎日お世話になる医師、看護師さん他のスタッフの方々や、まわりの患者さん達に訪れるお見舞の方々の話を聞いていても、人を思いやる愛にあふれた会話ばかり。いやいや、盗み聞きしているわけではありません。自然と聞こえて来てしまうのです。

病院程、愛を感じる場所はないと思いました。人間は争う動物にもなるけれど、一人一人が愛と平和を信じて祈れば、世界は変わると思いました。

さあ、これからもガンと向き合い、撲滅、消滅を目指して精いっぱい生きるぞー。